1970年代から1990年代までの越前水仙の栽培農家の実態

安　達　啓　介

神戸学院経済学論集

第56巻　第３号　抜刷

令和７年１月発行

1970年代から1990年代までの越前水仙の栽培農家の実態

安　達　啓　介

1．はじめに

「越前水仙」とは，福井県の旧越廼村（現福井市）・越前町・旧河野村（現南越前町）の西端に広がる越前海岸一帯を主を産地とするニホンズイセン（学名 *Narcissus. tazetta L. var. chinensis* Roem）の呼称である。越前海岸は，千葉県の房総半島（鋸南町），兵庫県の淡路島（南あわじ市）に並ぶニホンズイセンの三大生産地の１つであり，国内最大の栽培面積を誇る（前阪，1995；福井県，2024)。越前水仙の栽培は，この地の伝統的生業として，観光資源として，特に冬の越前海岸一帯を白く彩る「冬の風物詩」として長らく親しまれてきた。日本海の厳しい寒風に耐えて育つ越前水仙は，他産地の水仙と比べて葉や茎が固く引き締まり芯が強いため，傷みにくく長持ちしやすい。また，豊かな芳香をもつことも特徴の１つである。その凛とした草姿と花もちの良さから，冬の生け花に欠かせない花材として根強い人気を保ち続けてきた。一方で，切り花としての水仙には高い品質が要求されてきた。そのため，生産者はその要求に見合う厳しい出荷規格を自ら設定し，それを満たす水仙だけを「越前水仙」というブランドで市場に送り出してきた。これらの取り組みによって，他産地との商品差別化を図り，その経済的価値を維持してきた。しかし近年，越前水仙の生産状況は低迷し続けている。最盛期には県全体で400～500万本台，あるいはそれ以上の出荷が可能であったが，1990年代後半から明らかに減少傾向が見

られるようになり，近年では100万本を割り込むようになった（福井県，2019）。生産額についても，ピーク時には切り花需要期だけで１億円以上を売り上げる年もあったが，こちらも減少傾向にあり，最近では4,000万円代下回る状況にまで落ち込んできている（福井県農林水産部，2024）。

越前水仙の供給面における課題として，露地栽培出荷量の不安定さや水仙農家の高齢化と減少，後継者不足，球根の過密化による収量・品質の低下，急峻な栽培地での作業の効率化などが長年，栽培農家を悩ませてきた。加えて，ここ15年ほどの間でイノシシやシカによる獣害が急増しており，水仙栽培に限らず，地域農業を崩壊させかねない問題となっている。需要面では，11月から12月初旬にかけての花稽古や文化祭での切り花需要，12月下旬から元旦にかけての正月花としての需要に，いかに出荷のピークを合わせられるか，出荷量を確保できるかが，収益最大化の鍵とされてきた。そしてそれは，水仙農家や出荷関係者にとって最大の関心ごととされてきた。しかし現実問題として，その大元の水仙需要を創り出してきた華道（花道）人口は減少し続けており（文化庁，2021），それにともなって国内の切り花需要自体も縮小傾向にあるといえる。そのため，越前水仙の生産を持続させるためには，これまでの切り花需要を満たしていくことも変わらず重要であるが，それとは別の視点・発想から，新たな水仙需要・販路を見出していくことが求められている。

これらの課題の多くは，水仙などの花き生産に限定されるものではなく，国内の中山間地域における農業全般に共通する問題である。だが，越前水仙の場合，出荷が困難となることによって失われるものは，単に越前水仙という特産品・ブランドだけではない。長年の水仙栽培によって育まれてきた「越前海岸の水仙畑」というこの地独特の景観も，今あるかたちでは将来的に維持できなくなる可能性がある。それはひいては，水仙畑の観光資源としての景観的価値や，同地域の生活・農業の歴史が刻んできた文化的価値の減退・消失につながる。さらには，越前水仙と華道・いけばな文化との間で長年紡がれてきた歴史的なつながりや文化的価値の相互連鎖も途絶えてしまうことを意味する。

このように，越前水仙の生産と経営は，供給面においても需要面においても，大きな岐路に立たされている。特に，生業としての水仙栽培の持続性が大きく揺らぎ始めている。これらの問題解決に資する学術的知見はまだまだ少数であるが，例えば林ら（2001）は，旧越廼村の生産者55人を対象としたアンケート調査から，急傾斜地や寒冷地での作業，労働時間・休憩時間の実態と課題を明らかにしている。それによれば，作業環境・効率の改善が求められる作業として，「草刈り作業」(92.5%)，「収穫作業」(46.1%)，「球根の掘り取り作業」(45.0%)，「出荷調整」(37.0%)，「施肥」(33.2%)，「植え付け」(24.5%）が挙げられている。また，圃場条件について，６割の生産者が傾斜地の整備を望んでいることを明らかにしている。さらに，労働改善の案として，圃場への簡易歩道や簡易作業道の設置，急峻地でのスパイクシューズの着用，寒冷地でのフリース製品着用の推進などを提言している。

同上調査から抽出された課題の解決を目的として，各産地の生産者ならびに農協組織，福井県経済連，行政・研究機関らの連携によって立ち上がったのが「越前スイセン振興プロジェクト」(平成18～平成21年度）である。このプロジェクトに関して榎本（2010）は，労働改善マニュアルの作成と普及啓発，球根堀り機械化による改植作業の省力化，都市住民と農村との改植作業を通じた交流への支援，球根改植運動の定着，収穫・調製（水洗い，切り揃え）の委託と選別箱詰委託集出荷体制の試行，モデル集落生産組織の育成，平坦地でのハウス栽培の推進等の取り組みを報告している。またその成果として，出荷量が徐々に回復してきたこと，2008年（平成20年）には市場要求量（当時は200万本）を超えたことを報告している。また，平坦地の新規生産者（主に促進栽培）と既存産地の生産者が改植体験（ボランティア）を通じて親交を深めたことをきっかけに，改植時に余った球根の新規生産者への割譲が既存の産地生産者に認められるようになり，それによって新たな平坦地生産者を増やすことが可能になった点を指摘している。

越前水仙の生産・経営に関する研究として，山内（2020）は，越前町上岬地

区（梨子ケ平・左右・血ヶ平）を中心に，水仙栽培の現状と課題について考察し，その解決に向けた取り組みとして公民連携により実施された血ヶ平集落の水仙棚田再生事業の内容とその成果を報告している。その中では，シカによる葉の食害や，イノシシによる圃場の掘り返しなどへの即効性のある獣害対策の必要性や，「交流人口」の増加による集落と農業の持続化とその意義について指摘している。さらに今後の水仙生産・経営の在り方として，水仙畑の再生をメインとしつつも，それを最終目標とするのではなく，地域全体や隣接する生産地も視野に入れた，地域固有の海や山の資源を総合的に組み合わせた通年型の観光の必要性を説いている。加えて，杉山（2022）は，越前町上岬地区の梨子ヶ平集落を学習フィールドとして行われてきた大学生によるアクティブ・ラーニングに着目し，そこでの学生の学びや活動が，当地区の集落活性化に与える影響を検証している。同論文では，当集落で実施されている「越前水仙の収穫体験」の商品化や，遊休古民家等の利活用による「おもてなし拠点」整備の可能性，情報発信や交流と経済を生む拠点の整備，そして，地元の高校生や大学生に対する「学習フィールド」の場として集落を開放などの取り組みが紹介されている。その中で著者は，「越前水仙の収穫体験」の商品化のきっかけが，当集落におけるアクティブ・ラーニングを通じて大学生が体験した「越前水仙の収穫」であり，それが図らずも商品化に向けてのモニター的役割を担ったと指摘する。また，栽培農家にとって日常の仕事である「収穫作業」を，楽しそうに笑顔で取り組む学生らの姿を目の当たりにしたことが，地元住民やコーディネーター役となりうる「外部のリーダー」たちを新たな取り組みに誘い込む原動力となったと考察している。この２つの研究は，地域再生や地方創生という政策的視点から越前水仙の持続可能な生産と景観保全のあり方にせまる実践的研究である。

いずれの研究・報告も，現状の水仙生産の低迷をどう打開するかという点に主眼を置いており，そのための具体的な取り組みや政策の現状，効果に関する分析・考察が豊富に含まれている。しかし一方で，その対象である水仙農家の

生産・経営の実態や，これまでの産地発展，産地弱体化の歴史的背景・経緯については部分的・断片的・表面的にしか触れられておらず，それらに関する詳細な検証もほぼ行われていない。経営戦略にしても農業政策にしても，対象の実態や歴史的背景を十分に捉えない，踏まえないままでは，議論の出発点や戦略，政策の焦点を見誤る可能性がある。その意味で，水仙生産に関わる戦略的・政策的議論または実践的取り組みのベースとなりうるような，越前水仙の生産・経営に関する歴史的ないし経済的・経営的な視点を含む基礎研究が必要である。具体的には，越前水仙の各産地がどのように発展し，現在の栽培・出荷体制が構築されるに至ったのか，そしてその間，水仙農家の生産・経営状況がどのように変化したかについて解明する必要がある。その点，福井県（2019）は，越前水仙の栽培の歴史や文化，産地発展の変遷と課題について網羅的に調査・整理を行い，総合的に分析したものと評価できる。だがこの調査の主眼は「越前海岸の水仙畑の文化的景観」の将来にわたる継承・保全にあるため，水仙農家の生産・経営に関する経済的・経営的な側面からの検証が乏しい。特に，1970年代から1990年代にかけての，ちょうど水仙産地としての成長期，成熟期，弱体期の初期に当たる時代の，水仙農家の生産・経営の実態やその変化については，部分的・断片的なデータや報告は存在するものの，その全体像は明らかになっていない。この時代の水仙農家の実態を明らかにすることは，その後の県内産地の弱体化の原因とその影響の度合をより明確にする上で極めて重要である。

そこで本稿では，1970年代から1990年代に焦点を絞って，越前水仙の産地および栽培農家の生産・経営の実態を明らかにする。その際，1970年代，1980年代，1990年代の３つの時代区分で，それぞれの年代の水仙農家の実態を整理・分析する。また，1990年代の後継者事情についても検証する。ただし，越前水仙の栽培方法・出荷体制に関する内容は，福井県（2019）などで詳細に整理されている部分も多いため，本稿では既知の内容については必要最小限の内容にとどめる。

調査対象地は，越前水仙の主産地である旧越廼村（以下，「越廼村」と略す）・旧越前町（以下，「越前町」と略す）・旧河野村（以下，「河野村」と略す）の３産地である（図１）。使用したデータは，各市町における越前水仙の栽培や出荷，経営，歴史に関する報告書・統計資料・史料に加え，2013年７～８月にかけて越廼村・越前町において実施した水仙農家（３人）と県職員（２人），地元農協，元農協職員（１人）からの提供データおよび聞き取り調査，そして越廼村・越前町におけるフィールド調査の結果（以下，「2013年調査」と略す）をもとにしている。

２．対象地の自然的特徴

福井県嶺北地方の西側に位置する越前海岸は，断層活動によって形成された丹生山地を分水嶺とする隆起海岸であり，その海岸沿い（丹生山地西岸）の斜面には海岸段丘と急崖が連なる。越前海岸の範囲は，北は東尋坊（坂井市三国町安島）から南は敦賀湾入り口（敦賀市黒崎または杉津）までの海岸を指すことが多いが，厳密には定義されていない。本研究で想定する越前海岸は，越前岬（越前町上岬地区）を中央に，その地区に隣接する越廼村，河野村を跨る海岸一帯を指すものである（図１）。

水系としては，丹生山地を分水嶺に，越前海岸側で短く勾配が大きい河川が多い。それらの河川によって形成された谷間や，海岸沿いなどの限られた土地で集落が形成されてきた。集落では，川沿いまたは山沿いのわずかな土壌地を用いて，稲作や畑作が営まれてきた。

産総研知識調査総合センターが公表している「20万分の１日本シームレス地質図V2」によれば，越前海岸一帯の地質は主に中新世以降に形成された火成岩と堆積岩である。特に，越前岬付近は海側が礫岩，山側が砂岩・泥岩となっているため，この一帯の表土は，これら礫岩や砂岩・泥岩が風化したことによって形成された砂質系の土壌となっている。また，急勾配な地形である。そのため同地域は，水はけが良い場所を好むニホンズイセンにとっての自生また

図１　調査対象地（旧越廼村・越前町・旧河野村）

は栽培に適した土地柄であると考えられる。

福井県は，夏季は高温多湿で，冬季は寒冷で曇りや雪の日が多い日本海側気候に属する。また，豪雪地帯であるため冬季の積雪量が多い。そのため県全体で見ると，降水量は夏季より冬季の方が比較的多くなる。気象庁のデータ（1991～2020年）によれば，県内各市町の月別平均気温は，夏季（６～８月）の平均気温についてはほぼ差が見られないが，冬季（12～２月）ではいずれの月も越廼村の平均気温が最も高い。嶺北地域（南越前町より以北の地域）に限れば，冬季の越廼村の月別平均気温は，他の市町よりも２℃ほど高い。また，年間平均気温（15.6℃）も県内最上位の暖かさである。これは対馬海流（暖流）によるものであるが，この影響は越前海岸一帯（越前町・河野村）でも同様であると考えられる。よって，越前水仙の産地である越前海岸一帯は，年間を通

じて比較的温暖な地域であるといえるだろう。また，冬季も比較的暖かいことから，これらの地域は内陸部と比べると降雪量が少なく，その影響もあって冬季の降水量も比較的少ないことも特徴の１つである。気象庁・国土交通省が公開している平均最深積雪深の「メッシュ平均値2010」（1981～2010年）のデータによれば，越前海岸一帯は 20～40 cm 未満の地域が多く，特に越前岬付近の最深積雪深は 20 cm 未満であることが確認できる。これは当地域の降雪量の少なさを間接的に示すものである。ただし，最新のデータ「メッシュ平均値2020」（1991～2020年）と比較すると，越前町の南端沿岸部を除いた越前海岸一帯の平均最深積雪深が 40～60 cm 未満に変化している。この変化は，次節で説明する越前水仙の花や葉などの折損リスクに大きく関わるものである。

３．1970年代から1990年代の水仙生産の実態

3.1　1970年代の水仙農家の実態

1970年代の越前水仙の生産状況については，北陸農政局統計情報部編（1978）が，1972年から1976年（昭和47～51年）までの産地全体での栽培面積と出荷量（その年の１～12月の集計値）を報告している（図２）。それによれば，この期間の栽培面積は 50～60 ha（平均 52 ha）を推移していた。出荷量については120万～213万本（平均178万本）であったが，年毎にばらつきが見られる。栽培面積 10 a 当たりの出荷量（その年の出荷量を栽培面積で除した値）は２千～５千本（平均3.1千本）であった。

同上資料では，1976年時の水仙の栽培農家戸数・栽培面積・出荷本数・粗生産額も報告されている（表１）。それによれば，1976年時の栽培農家戸数および栽培面積は，越廼村で183戸・17 ha，越前町で92戸・32 ha，河野村で27戸・1 ha，産地全体で302戸・50 ha であった。栽培面積は越前町が最大であり，栽培農家は越廼村が最多であった。また，越廼村では越前町の約２倍の農家が水仙栽培に従事していた。

出荷量は越廼村の85万本が最多で，次いで越前町が65万本，河野村が５万本

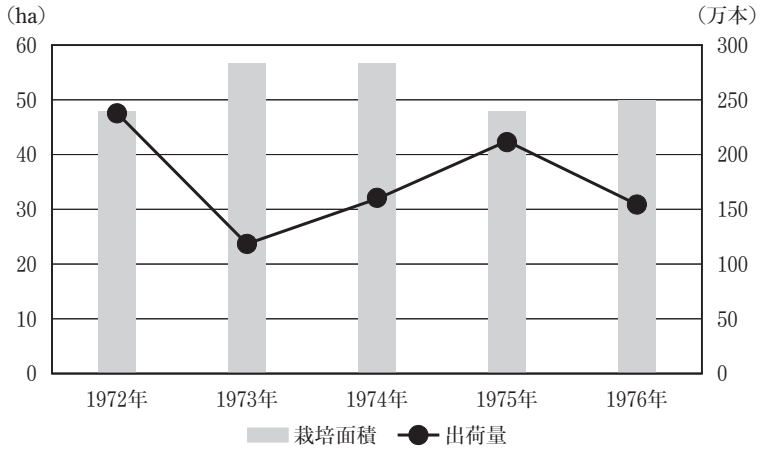

図２　1972～1976年の産地全体の栽培面積と出荷量

出典：北陸農政局統計情報部編『北陸の特産物』（1978年）のp.177「表１」より作成

であり，産地全体で155万本であった。粗生産額[(1)]もそれぞれの出荷量に準じた大きさであった。ただし，粗生産額については，他の年代の粗生産額等との比較を可能にするため物価調整を行った。本稿では，過去の粗生産額や価格等は，2020年（令和２年）を基準とした農業物価指数（（２）品目別月別価格指数：花き）をもとに物価調整を行った上で，主にその金額をもとに比較・分析を行っている。以降に記載する粗生産額も同様である。

栽培農家１戸当たりの栽培面積は，越前町が34.8ａで最大であった。一方，越廼村は，越前町の約半分の面積で約２倍の農家が栽培を行っていた影響から，１戸当たりの栽培面積が小さかった。また１戸当たりの粗生産額は越前町よりも10万円ほど少なかった。だが，越廼村の栽培面積10ａ当たりの出荷量は５千本であり，この値は越前町の約2.5倍の水準であった。また，10ａ当たりの

（１）　ここでの「粗生産額」（農業粗生産額）とは，その年の１月から12月の１か年の間に生産された農産物について，その生産量に農家庭先販売価格（卸売価格から集出荷経費および卸売手数料を控除した価格）を乗じて算出した金額であり，従来，市町村の推計単位として用いられてきたものである。

粗生産額は越前町の約2.6倍であった。このように，当時の越廼村は，比較的少ない面積で多く農家が栽培に取り組んでいたため，単位面積当たりの出荷量および粗生産額は高いが，農家１戸当たりの粗生産額が低い産地であった。一方，越前町は，栽培面積が比較的大きく，農家１戸当たり栽培面積も粗生産額も大きいが，単位面積当たりの出荷量・粗生産額が比較的小さい産地であった。河野村については，農家１戸当たりの栽培面積と出荷量がともに最小（3.7a，1.9千本）であったものの，10a当たりの出荷量が５千本，粗生産額が約23万円と，越廼村に近い水準であった。この点は，河野村の水仙産地としてのポテンシャルの高さを表しているといえる。だが，生産規模はまだまだ小さい時期であったため，市場における影響力は他２町村と比較すると小さかったと推察される。また，同上資料によれば，当時の「生産地の集落は，零細な半漁半農あるいは林業や，出稼ぎを主とした農家が大半を占め，栽培の担い手は主に婦女子」であった（p. 176）。この傾向は後の3. 4節でも説明するように，1990年代においても確認できる。

表１　1976年時点での栽培農家戸数・栽培面積・出荷量・粗生産額

	栽培農家（戸）	栽培面積（ha）	出荷量（千本）	粗生産額（万円）		栽培農家１戸当たり			栽培面積10a当たり		水仙単価（円/本）
				当時の額	物価調整	栽培面積（a）	出荷量（千本）	粗生産額（万円）	出荷量（千本）	粗生産額（万円）	
越廼村	183	17	850	1,910	4,170	9.3	4.6	22.8	5.0	24.5	49
越前町	92	32	650	1,365	2,980	34.8	7.1	32.4	2.0	9.3	46
河野村	27	1	50	105	229	3.7	1.9	8.5	5.0	22.9	46
計/平均	302	50	1,550	3,380	7,380	16.6	5.1	24.4	3.1	14.8	48

出典：北陸農政局統計情報部編『北陸の特産物』（1978年）の p. 178「表２」をもとに作成

水仙１本当たりの平均単価は，越廼村が49円，越前町と河野村が46円，産地平均で48円であった。越廼村の単価が３円ほど高い理由は，他の町村と違って，ほとんどの水仙が共販体制（越前水仙出荷組合）のもとで組織的・労働集約的に出荷できていたためと考えられる。北陸農政局統計情報部編（1978）によれば，越廼村では全出荷量の約97%が共販体制のもとで出荷されていた。2013年調査によれば，この時期には既に同村内で統一化した出荷規格をもとに選花・選別が実施されていた。一方，越前町では，共販対象は全出荷量の約15%にと

表２　産地ごとの集出荷組織と出荷量の内訳

	組織名	共販出荷量（千本）	共販出荷量（割合）	個人出荷量（千本）	個人出荷量（割合）	合計（千本）
越廼村	越前水仙出荷組合	821	96.6%	29	3.4%	850
越前町	越前町花卉生産組合	100	15.4%	550	84.6%	650
河野村	－	－	－	50	100.0%	50
計	2	921	59.4%	629	40.6%	1,550

出典：北陸農政局統計情報部編『北陸の特産物』（1978年）の p. 179「表５」と2013年調査（組織名の特定）をもとに作成

どまり，大半は個人によって出荷されていた。河野村については，1976年時点で水仙の集出荷組織が存在しなかったため，個人出荷が100%であった。このように，出荷体制の有無と組織的な出荷調整の強弱が，各地の水仙単価の差として表れたと考えられる。

同上資料および2013年調査によれば，越前町・河野村では，古くは戦前からの個人販売でのつながりから，京阪神地方をはじめ，中京（主に名古屋），北陸，関東（主に東京），岡山方面の問屋や花屋との直接取引を行っていた。また，個人販売を行う水仙農家は，市場価格の動向を注視しながら各人各様で自由に取引していた。そのため，需要ピーク時（特に12月）に各農家が競って出荷量を拡大させてしまったり，大量供給が各自で重なってしまったりすると，全体として供給過多となり値崩れが起きる危険性があった。福井農林統計協会（1965）によれば，当時は両町村の個人販売は問屋まかせの出荷であり，そのため市場における着荷の変動が甚だしく，市場卸売価格の不安定化を招く原因となっていたことが指摘されている。これは少なくとも1965年時点における内容であるが，表２の内容を踏まえると，少なくとも1976年時点でも出荷体制はほぼ変わっていなかったといえる。2013年調査によれば，産地ごとに無統一に出荷することをやめて，すべての出荷・規格を一本化するといった「共選共販体制」の思惑・構想は，1960年代には既にあったようである。それに関して福井農林統計協会（1965）には「越廼，越前，河野の３町村を一本とした共販体制が痛感されるが，中々前途は多難なようである」（p. 24）と記されている。

また，北陸農政局統計情報部編（1978）には「町村も農協を通じて共販体制の指導に乗り出すとともに，出荷市場の開拓及び一部促成栽培への切替えによる出荷量調整等の安定策を講じようとしている」（p. 179）とある。これらの文言を踏まえると，少なくとも1978年までは，３町村が連携しての集出荷体制の構想は俎上に上がっていても，実際の構築には至れていなかったと推察できる。事実，３市町の農協（現 JA 越前丹生，現 JA 越前たけふ）と JA 福井県経済連が主体となって構築された「越前水仙出荷協議会」は1979年９月26日に設立されている（榎本，2010）。ただし，同協議会によって，出荷規格の統一化と出荷先の調整は行われるようになったものの，出荷自体は1994年度（平成５年度）まで各町村の農協単位で実施されていた。

3.2　1980年代の水仙産地の実態

北陸農政局福井統計情報事務所編（1987）では，1980～1985年の産地全体での栽培農家戸数・栽培面積・出荷量・粗生産額が報告されている（表３）。それによると，栽培農家は1980年をピークに翌年には60戸以上減少していた。だがその後の減少傾向は緩やかであり，農家戸数は230戸後半を推移していた。栽培面積も若干の減少傾向が見られたが，概ね 60 ha 台を維持していた。また，1976年時点（50 ha）と比較すると 10 ha 以上拡大していた。

1985年時点の農家１戸当たりの栽培面積は，1976年時と比較すると約1.6倍に増えており，26 a 台で安定していた。出荷量については1982年の約509万本が最多であり，最少は1985年の約114万本であった。不作年とされる1985年を除いた平均出荷量（1980～1984年）は約365万本であった。

1982～1984年の３年間で見ると，出荷量は産地全体で年間400万本以上（３年平均443万本）を維持できており，その間の農家１戸当たりの出荷量は1.7～2.1万本（３年平均1.8万本）であった。この水準は1976年時（5.1千本）の3.3～4.1倍である。また，１戸当たりの粗生産額は25.8万～40.6万円（３年平均32.1万円）であり，1976年時（24.4万円）と比較すると1.1～1.7倍に増えていた。

表３　1980～1985年の栽培農家戸数・栽培面積・出荷量・粗生産額

	栽培農家	栽培面積	出荷量	粗生産額（万円）		栽培農家１戸当たり			栽培面積10a当たり		水仙単価
	（戸）	（ha）	（千本）	当時の額	物価調整	栽培面積（a）	出荷量（千本）	粗生産額（万円）	出荷量（千本）	粗生産額（万円）	（円/本）
1980年	310	65	3,004	3,900	4,615	21.0	9.7	14.9	4.6	7.1	15
1981年	243	68	1,985	2,200	2,781	28.0	8.2	11.4	2.9	4.1	14
1982年	240	63	5,092	5,700	6,202	26.3	21.2	25.8	8.1	9.8	12
1983年	242	63	4,080	6,100	7,227	26.0	16.9	29.9	6.5	11.5	18
1984年	239	62	4,110	7,400	9,699	25.9	17.2	40.6	6.6	15.6	24
1985年	237	62	1,141	2,700	2,869	26.2	4.8	12.1	1.8	4.6	25
平均	252	64	3,235	4,667	5,566	25.3	12.8	22.1	5.1	8.7	17

出典：北陸農政局福井統計情報事務所編『わが村，わが町の特産物―福井県―』（1987年）のp.59「表１」をもとに作成
注）表中の各値は当年１月から12月までの集計値

栽培面積10a当たりの出荷量については，6.5千～8.1千本（３年平均7.1千本）であり，1976年時（3.1千本）と比べると5.4～6.8倍に拡大していた。一方，10a当たりの粗生産額は9.8万～15.6万円（３年平均12.3万円）であり，1984年以外は1976年時の水準を下回っていた。この単位面積当たりの粗生産額の低迷は，1980～1985年の全体の傾向として見られた。

しかし，1985年は不作となり，出荷量（114万本）は昨年比（411万本）で72％も減少した。不作に起因して，この年の水仙単価（25円/本）は1980～1985年間での比較においては最も高い値となった。当年の不作の要因について，北陸農政局福井統計情報事務所編（1987）は，隔年結果と出荷前の時期の降雪の影響を指摘している。隔年結果とは，１年または数年おきに豊作（表年・なり年）と不作（裏年・不なり年）を繰り返す植物生理現象であり，多くはミカンやリンゴ，ナシ，カキなどの果樹作物に見られる問題である。農山漁村文化協会編（2021）によれば，隔年結果によって収量が20～30％の範囲で増減すると言われている。だが，1985年の水仙出荷量の減少率はその範囲を大きく超えている。2013年調査での越廼村の栽培農家への聞き取り調査では，生産者側は，実際に豊作と不作が隔年に近い形で繰り返えされてきた経験をもとに，ニホンズイセンが隔年結果の性質をもつ園芸作物だと認識しているように見受けられた。しかし，筆者が知る限り，ニホンズイセンが隔年結果をもつかどうかは現

時点（2024年末）では科学的に実証されていない内容であり，その程度も不明である。

2013年調査や当年の気象に関するデータからは，むしろ後者（早期の降雪）やその他の天候条件の影響を強く受けているように見える。実際，出荷時期の降雪，特に出荷前の早い時期（11〜12月）の降雪は，水仙の花や葉の折損リスクを高め，出荷作業そのものの効率を低下させる。前節で確認したように，越廼村をはじめ，水仙畑が分布する越前海岸一帯は，対馬海流の影響により冬季でも比較的暖かく，豪雪地方に属しながらも積雪が少ない地域である。だがそれでも，年によっては20〜40 cm 程度の積雪が起こりうる。そもそも多少の積雪があってもニホンズイセンは問題なく育つが，問題はその積雪が切り花商品としての品質にどれだけの悪影響を与えるかである。2013年調査によれば，12月の正月花用の出荷が控えている時期に短期間（１〜２日）で20 cm 以上の積雪が発生すると折損リスクが高まるようであり，そのリスクは積雪量（特に最深積雪深）が多くなるほどより高まるとのことであった。ただし，みぞれや少量の積雪であっても，風雪によって水仙の花や葉が極端に押し下げられたり，短期間に多くの氷雪が付着する場合でも折損が起きるとの証言もあった。また，積雪や厳しい風雪によって水仙の切り出し作業の効率が下がる場合や，そもそも作業自体が困難となる場合もあったという。

気象庁のデータによれば，1985年８月の平均気温（28.9℃）は例年よりも高く，日照時間（304.5時間）も長かった。特筆すべき点は８月の降水量が０mm であったことである。水仙の露地栽培において８月の降雨量はその後の生長に大きく影響する。丹生農業改良普及センター（1999）および2013年調査によれば，露地栽培の場合，６月上旬から中旬にかけて茎葉が枯れあがった頃合いに１回目の草刈りを行い，８月下旬から９月頭までの球根の出芽前までに２回目の草刈りを行う。その間，土中の球根は，例年８月中旬（お盆過ぎ当たり）から９月上旬の雨を受けて根を張り出していく。1985年の場合，８月の降水量がゼロであるため，明らかに根を張り出すための育成・気候条件は悪かったと指

摘できる。その影響により開花の時期が遅れた可能性があり，それが当年の不作に影響したと考えられる。さらに，出荷のピーク期に当たる11～12月の同年の気象状況を見ると，日照時間に関しては前年（1984年）の同じ月と比べて，11月でマイナス82.4時間，12月でマイナス20.4時間であり，例年と比較しても短い時間であった。また11月と12月の降水量はともに300mmを超えており，これらは例年の値と比べると抜きん出て高い数値であった。加えて五十嵐（1987）は，1985年は12月中旬ごろから北陸地方ならびに福井県内において積雪があったこと，同時期に北陸自動車道（福井―金沢東インター間）や国鉄北陸線（当時）が全面的にストップしたこと，そして同時期に気象庁が福井県，富山県などに対して大雪警報を発令したことを記録している。事実，12月下旬から１月下旬のほぼ１か月の間に海岸・平野部を中心にドカ雪が降った（国土交通省北陸地方整備局，2021）。この大雪が，特に12月の降水量増大の原因であり，また同時期の水仙の出荷を全面的に阻害し，大幅な減収をもたらす主要因となったと考えられる。ただし先述したように，この年の８月の降水量の少なさは特異的であり，この点も当年の出荷量の激減に影響を与えたと考えられる。ただし，この予想の検証は本研究の主題ではないことから，別の研究で改めて取り扱うこととする。

3.3　1990年代の水仙農家の実態

1990年代の水仙農家の生産・経営の実態を知ることができる資料として，北陸農政局福井統計情報事務所編（1997）がある。これは1995年時点の各産地の水仙農家の経営状況に関するアンケート調査[(2)]報告書である。これによると，専業・兼業農家の割合は，どの産地も第２種兼業農家が最も多かった。越廼村で

（２）　本アンケートの調査対象数は計299戸であり，その内訳は未回収79戸，無記入28戸，回答数193戸であった。回答数193戸のうち25戸の回答には一部未記入部分があったが，それらの回答結果も有効回答（193戸）に含まれている。この調査は1996年２月下旬から３月下旬に1995年産を対象に実施された。

表 4　専業・兼業農家の割合

	専業	兼業		合計
		第 1 種	第 2 種	
越廼村	10	3	72	85
越前町	18	5	44	67
河野村	8	4	23	35
合計	36	12	139	187

出典：北陸農政局福井統計情報事務所編『越前すいせん ―栽培農家のアンケート結果―』(1996年)，p 17 の集計値をもとに作成

表 5　1995年度時点での栽培農家戸数・栽培面積・出荷量・粗生産額

	栽培農家	栽培面積	出荷量	粗生産額（万円）		栽培農家 1 戸当たり			栽培面積 10 a 当たり	
	（戸）	（ha）	（千本）	当時の額	物価調整	栽培面積（a）	出荷量（千本）	粗生産額（万円）	出荷量（千本）	粗生産額（万円）
越廼村	79	24.8	180	873	829	31.4	2.3	10.5	0.7	3.3
越前町	66	41.3	620	3,006	2,855	62.6	9.4	43.3	1.5	6.9
河野村	30	10.9	190	921	875	36.4	6.3	29.2	1.7	8.0
計/平均	175	77.0	990	4,800	4,558	44.0	5.7	26.0	1.3	5.9

出典：北陸農政局福井統計情報事務所編『越前すいせん ―栽培農家のアンケート結果―』(1996年)，福井県『越前海岸の水仙畑 文化的景観保存調査報告書』(2019年) より作成

は全栽培農家の85%が，越前町・河野村ではそれぞれ66%が第 2 種兼業農家であった（表 4)。ここから，どの産地も大部分の栽培農家は農業以外の収入で生計を維持していたことが分かる。

同上資料によれば，産地ごとの栽培農家戸数および栽培面積は，越廼村で79戸・24.8 ha，越前町で66戸・41.3 ha，河野村で30戸・11.6 ha，産地全体で175戸・77 ha であった。これらのデータと福井県（2019）で報告されている1995年度の出荷量・粗生産額の値をもとに，栽培農家 1 戸当たり栽培面積・出荷本数・粗生産額と栽培面積 10 a 当たりの出荷量・粗生産額を算出した（表 5)。ただし，粗生産額については産地全体の総額しか分からなかったため，本分析では1995年度の総出荷量（99万本）に占める各市町の出荷量の割合で，当年度の生産額（4,800万円）を各市町の粗生産額として割り当て，それらの値をも

とに分析を行った。

1976年時（表１）と1995年度（表５）の各値を比較すると，約20年の間に栽培農家が産地全体で100戸以上減少したことが分かる。産地ごとの農家戸数を比較すると，越廼村では６割，越前町では３割ほど減少している中で，河野村は１割ほど増えている。栽培面積については越廼村では約1.5倍，越前町では約1.3倍，河野村にいたっては約10.9倍に増えていた。

出荷量と生産額については，1995年度が不作であったことから，この年の越前水仙の出荷量は，前年度（411万本）の４分の１未満（99万本）に落ち込んだ。2013年調査によれば，この不作によって，越前水仙の供給量が市場要求量を大きく下回り，市場価格が高騰した。このため，当年度の越前水仙の平均単価（円/本）は48円物価調整込みで46円と高めであった。1995年度の不作について，その原因等が具体的に記された報告書・統計資料等は発見できなかったが，考慮すべき天候条件として，同年７月の降水量（675mm）が観測史上２番目に多い記録（2024年11月末時点）であったことと，８月，９月の降水量がともに少なかったことを挙げておく[3]。

次に，栽培農家１戸当たりの栽培面積を見ると，1976年と比べて，越廼村では約3.4倍，越前町では約1.8倍，河野村では約9.8倍に拡大していた。このうち越廼村・越前町については，産地ごとの栽培面積の倍増率よりも高い値であった。これは，栽培農家の倍率以上に栽培面積の倍率が高まったためである。特に越廼村は，栽培農家が６割減る中で，栽培面積が減ることなくむしろ拡大したことによって，農家１戸当たりの栽培面積が急増した。この背景には個々の農家において栽培面積の集約化や栽培規模の拡大があったと考えられる。2013年調査によれば，1990年代以降，農家の高齢化や担い手の減少が問題化する中で，各産地では，生産規模の拡大や経営の効率化を目的として，栽培地の集約化，栽培規模の拡大が図られていた。特に越廼村は他の産地より栽培規模が小

（３） ちなみに最大記録は2006年７月の728mmであり，興味深いことにこの年度の生産額は歴代ワースト３位である（１位は1985年・2015年度）。

さい水仙農家が多いため，各自が栽培規模を拡大することが収益率向上の有望な手段であった。当時の農家の栽培規模について，北陸農政局福井統計情報事務所編（1997）によれば，越廼村では10a未満の栽培農家が全体の28%を占めていた（図3）。また10a～30a未満が全体の29%を，30a～50a未満が25%を，50a未満の範囲でみると全体の82%を占めるほどに，越廼村の栽培農家は小規模零細であった。一方，越前町も50a未満の栽培農家の割合が全体の5割を占めていたが，残りの5割は50a以上の規模の農家であるから，比較的栽培規模の大きい農家が存在していたことが分かる。また，河野村も50a未満の農家の割合が全体の77%と越廼村と類似しているが，150a以上の規模の大規模栽培農家の割合が高い。

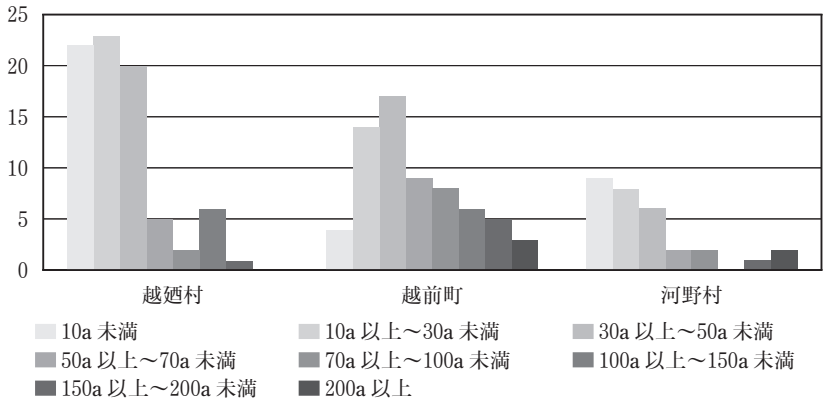

図3　産地ごとの栽培規模別農家戸数（単位：戸）

出典：北陸農政局福井統計情報事務所編『越前すいせん —栽培農家のアンケート結果—』(1996年)，p.9の集計値をもとに作成

他にも，越廼村の農家1戸当たりの栽培面積の倍増率が高い理由として，区画の再整備や栽培規模の拡大に対する意識の高さの違いを挙げることができる。例えば，北陸農政局福井統計情報事務所編（1997）のアンケート調査のうち「すいせん栽培おける問題点（1．圃場条件等の整備)」（表6）の集計値を見ると，どの産地も共通して「（2）傾斜地の整理」，「（5）農道の整備」，「（6）

石等の障害物の除去」の割合が高い中，「（１）区画の整理・大規模化」の割合（8.6%）は越廼村が最も高いことが確認できる。また，「（３）耕土の改良」や「（４）排水施設の整備」の要望の割合は，特に越廼村と越前町において高い。どちらも水仙栽培に適した圃場の拡大および改良に対する強い要望が寄せられている。これらの要望は，水仙栽培に対する高い意欲を反映しているといえる。

また別の要因として，各産地の水仙が栽培されている場所の割合を挙げることができる。産地ごとの栽培面積の内訳（表７）を見ると，越廼村・越前町ともに水仙栽培に利用している農地として，畑の割合が最も大きい。越廼村に関しては全栽培面積の半分が畑で占められている。明確な違いとして，越前町の方が畑の栽培割合が越廼村より10ポイントほど小さい分，山林原野等での栽培割合が大きい点を指摘できる。他方，河野村では山林原野等での栽培割合が最も多く，全栽培面積の７割を占めていた。このように，越廼村・越前町では田・畑での栽培が，河野村は山林原野等での栽培が中心であることが分かる。農地の集約化は，一般に土地生産性が高い場所や人員移動や商品輸送のルートが短い場所に加え，所有者間の合意や生産区画の再整備が容易といった取引費用が低い場所から行われていくことが多い。水仙栽培においては特に，水はけが良く生育が良好な場所や，傾斜地が比較的緩い場所，比較的平坦な場所，区画の再整備が容易な場所，積雪が少ない場所，移動・輸送に時間がかからない場所（例えば，農道・林道が整備されている・標高が低い場所など）が対象となりやすい。これらの要素を比較的満たしやすい農地は，実際にこれまで水仙やそれ以外の農産物等を供給してきた田・畑である。そのため，その割合が比較的大きい越廼村・越前町において栽培面積の集約化や栽培規模の拡大が進むことは極めて自然であり，合理的であると考えられる。

1995年度から過去に遡って，産地ごとにどのような場所で水仙栽培が行われてきたかについては，明確なデータが得られなかった。だが，2013年調査から，1960年代以降，越廼村・越前町においては，傾斜度20～30度の急峻な海岸段丘上にある小規模な棚田や畑において栽培されてきたことが分かっている。これ

表 6　産地ごとの圃場条件等の整備にかかる要望数とその割合

	(1) 区画の整理・大規模化	(2) 傾斜地の整理	(3) 耕土の改良	(4) 排水施設の整備	(5) 農道の整備	(6) 石等障害物の除去	(7) 給水施設の整備	(8) 施設の導入	(9) その他	延べ回答数
越廼村	18	41	52	17	22	34	14	9	3	210
	8.6%	19.5%	24.8%	8.1%	10.5%	16.2%	6.7%	4.3%	1.4%	100%
越前町	5	28	26	16	39	19	15	11	5	164
	3.0%	17.1%	15.9%	9.8%	23.8%	11.6%	9.1%	6.7%	3.0%	100%
河野村	3	22	7	2	23	20	3	1	1	82
	3.7%	26.8%	8.5%	2.4%	28.0%	24.4%	3.7%	1.2%	1.2%	100%
合計	26	91	85	35	84	73	32	21	9	456
平均	5.7%	20.0%	18.6%	7.7%	18.4%	16.0%	7.0%	4.6%	2.0%	100%

出典：北陸農政局福井統計情報事務所編『越前すいせん：―栽培農家のアンケート結果―』（1996年），p. 18 の集計値をもとに作成

表 7　各産地の栽培面積の割合（上段の面積単位：a）

	田	畑	山林原野等	合計	回答者数
越廼村	621	1,275	582	2,478	78
	25.1%	51.5%	23.5%	100%	
越前町	974	1,783	1,374	4,131	66
	23.6%	43.2%	33.3%	100%	
河野村	52	282	757	1,091	30
	4.8%	25.8%	69.4%	100%	
合計	1,647	3,340	2,713	7,700	174
	21.4%	43.4%	35.2%	100%	

出典：北陸農政局福井統計情報事務所編『越前すいせん ―栽培農家のアンケート結果―』（1996年）の p. 17 の集計値をもとに筆者作成
注）それぞれの面積の値は1996年（平成 8 年）1 月 1 日時点のものである

を裏付ける記録として，福井農林統計協会（1965）には，水仙の「ほとんどが野生のままで崖や湖畔，道路の面などに生えている」（p. 23）とあり，そのような場所が「越廼村の大味から居倉，八ツ俣，越前町の左右，玉川，梅浦，厨，河野村の糠，甲楽城にかけての海岸段丘の標高 50～100 m までの斜面にある」（p. 23）とある。そして，自生・栽培含めての水仙畑の面積は越廼村で 30 ha，越前町で 20 ha，河野村 10 ha あったとの記述がある。これらの内容は1976年の各地の栽培状況（表 1 ）や2013年調査の内容と矛盾しない。

農家 1 戸当たりの出荷量および粗生産額に着目すると，1976年時との比較で

は越廼村で両方の値が半減した中で，越前町では約1.3倍，河野村では約3.4倍に増えた。一方，栽培面積10ａ当たりの出荷量および粗生産額は，越廼村で約0.1倍，越前町で約0.7倍，河野村で約0.3倍と軒並み低く，すべての産地において1976年時の水準を下回っていた。特に越廼村の落ち込みが激しかった。1995年の出荷量は越廼村で18万本，越前町で62万本，河野村で19万本，産地全体で99万本であったが，これらの出荷量は例年のそれと比較すると少ない値であり，その水準は1985年不作に次ぐ低さであった（福井県，2019）。だが，単純に1976年時の出荷量と1995年のそれを比べると，越廼村の出荷量が２割程度にまで落ち込む中，越前町は５％減にとどまっており，河野村にいたっては約3.8倍に増えていた。もちろん，1976年の出荷量155万本もその当時からすれば特段多い本数ではないため，当時の水準では不作年に入る可能性がある。だが，そうだとしても越廼村の減少率は突出している。この理由については，越廼村の単位面積当たりの生産性が８割以上低下していることから，早期の降雪や天候不順による生育不良，それに伴う出荷時期のずれ，さらには1970年代以前から問題視されていた球根の分球・密植化による収量・品質の低下など，主に土地生産性に関わる要素が複合的に影響していると考えられる。しかし，農家１戸当たりの生産性も半減していることを踏まえると，単純に栽培農家が６割減少したことによる地域内労働力の低下の影響もあって，越廼村では特に出荷量が落ち込んだと見るのが妥当であろう。

3.4　1990年代の水仙農家の後継者事情

北陸農政局福井統計情報事務所編（1997）からは，当時の各産地における後継者事情の一端を伺い知ることができる。それによれば，1995年時点で水仙栽培に従事していた人の数は，越廼村で134人，越前町で117人，河野村で65人，産地全体で316人であった（表８）。そして，ひと家族内での栽培従事者数は，越廼村・河野村では１人，越前町では２人が最多であった。

男女別の栽培従事者数を見ると，どの産地も女性が主な栽培従事者の６割以

表 8　主に水仙栽培に従事する人の数および平均年齢

	家族で水仙栽培に従事した人数				主な栽培従事者の性別		主な従事者の平均年齢	回答数
	合計（人）	1 人（回答数）	2 人（回答数）	3 人以上（回答数）	男性（人）	女性（人）		
越廼村	134	41	34	5	33	50	62	81
越前町	117	24	34	8	22	44	63	66
河野村	65	24	7	8	8	32	64	41
合計	316	89	75	21	63	126	63	188

出典：北陸農政局福井統計情報事務所編『越前すいせん ―栽培農家のアンケート結果―』(1996年)，p 18 の集計値をもとに作成

上を占めており，特に河野村においては 8 割を占めていた。これは，1970年代に見られた女性栽培従事者の傾向（3.1節）が，1990年代にも続いていることを示唆している。河野村において特にその傾向が高い背景には，かつての冬季における出稼ぎ事情が関係していると考えられる。この地域は古来より漁業が主幹産業として重要な位置を占めてきたが，冬場は季節風による荒海のため漁に出られない期間が多くあった。そのため，江戸時代後期から戦前にかけて，冬季の確実な収入を求めて杜氏として関西に出稼ぎに出る男性が多くいた（河野村誌編さん委員会，1984；上杉，1986)。その一方で，男性が出稼ぎで不在の間は女性が家や地域を支えてきた。このため，河野村は他産地よりも水仙の収穫・販売が女性の仕事として定着し，その名残が戦後も続き，1990年代まで根強く残ったと考えられる。

他方，主な栽培従事者の平均年齢は，越廼村で62歳，越前町で63歳，河野村で64歳であった。このことは，1995年時点で各産地において栽培従事者の高齢化が相当に進んでいたことを示している。

後継者の有無については，1995年時点でどの産地でも栽培農家の 7 割以上が後継者を確保できていないという状況だった（表 9)。産地ごとの後継者の内訳を見ると，越廼村・越前町においては男性の後継者の割合が多く，河野村では女性の後継者の割合が多かった。これは表 8 で確認した河野村における女性の栽培従事者の割合の傾向と同じであった。しかし，産地全体で見ると男性の

割合が多かった。これは現役の栽培従事者において見られた男女比とは逆の傾向である。また，後継者の平均年齢はどの産地も30歳代後半であった。

表９　後継者の有無

	後継者がいる栽培農家				後継者が		合計（戸）
		後継者の性別		後継者の平均年齢	いない（戸）	未決定（戸）	
	（戸）	男性	女性				
越廼村	19	11	8	35.2	31	34	84
越前町	20	15	5	36.7	23	23	66
河野村	8	2	5	38.4	23	10	41
合計	47	28	18	36.2	77	67	191

出典：北陸農政局福井統計情報事務所編『越前すいせん ―栽培農家のアンケート結果―』（1996年），p 18 の集計値をもとに作成

生産者の高齢化，後継者不足という問題は農業全般に共通するものである。2013年調査によれば，水仙農家の後継者問題は，昭和60年代以前から繰り返し懸念されていた。そして現在（2013年時），当時の後継者が高齢化し，再び同じ問題に直面しているという。そして，その状況は先の世代よりも厳しいという。従来の世代交代は，生産者の家族内に後継者がいない場合は，近隣地区に住む血縁関係者の中から水仙栽培に興味がある若者を探して，その者に水仙畑を任せるというやり方が主であった。しかし，地元の若者の多くが地区外へ流出，就職，そして定住していく中で，上記のような世代交代は困難となってきている。

５．結びにかえて

本論文では，1970年代から1990年代までの越前水仙の栽培農家の生産・経営の実態を検証した。以下にその要点を示す。

まず，1970年代においては，越廼村は，比較的少ない面積で多く農家が水仙栽培に取り組んでいたため，単位面積当たりの生産性は高いが，農家１戸当たりの粗生産額が低い産地であった。一方，越前町は，産地内最大の栽培面積であり，農家１戸当たりの出荷量および粗生産額も高かったが，単位面積当たり

の出荷量および粗生産額は比較的小さい産地であった。河野村は，栽培面積はわずかであったが，１戸あたり・単位面積当たりの生産性の高さから，生産地としてのポテンシャルが高い地域であった。

1980年代においては，1980年から1985年の産地全体のデータを見ると，栽培農家は230戸後半を推移していた。栽培面積は概ね60ha台を維持しており，1976年時点と比較すると10ha以上拡大していた。農家１戸当たりの栽培面積も，1976年時と比べて約1.6倍に増え，26a台で安定していた。出荷量は1970年代と同様にばらつきが見られたが，全体として1976年時よりも増大していた。出荷が好調であった1982～1984年は，年間400万本以上を出荷できており，農家１戸当たりの出荷量および粗生産額は1976年時と比べると増えていた。また，栽培面積10a当たりの出荷量も拡大していた。しかし，10a当たりの粗生産額については，全体として1980～1985年の方が低水準であった。

1990年代においては，1995年時のデータから，大部分の水仙農家が第２種兼業農家であり，農業以外の収入で生計を維持していたことが分かった。また，1976年時と比べて，栽培農家が越廼村では６割，越前町では３割ほど減少し，河野村では１割ほど増えていた。他方，栽培面積はすべての産地で増えていた。出荷量および粗生産額は，1995年度が不作であったため，前年度の４分の１未満に落ち込んだ。農家１戸当たりの栽培面積は，1976年時と比べて拡大していた。越廼村では，栽培農家が６割減る一方，栽培面積が拡大したことで，農家１戸当たりの栽培面積が急増した。その背景・要因として，①当時の越廼村の栽培農家の小規模零細さ，②区画の再整備や栽培規模の拡大に対する高い意欲，そして③各産地の水仙が栽培されている場所（田・畑・山林原野等）の割合を挙げることができた。また，農家１戸当たりの出荷量および粗生産額については，1976年時と比べて越廼村では半減する中で，越前町と河野村では増えていた。一方，1995年時の栽培面積10a当たりの出荷量および粗生産額は，すべての産地において1976年時の水準を下回った。これはこの年の不作が主要因と考えられたが，越廼村の単位面積当たりの生産性が８割以上低下していることを

踏まえると，単に天候的条件や土壌や球根の質などによる土地生産性の低下の影響だけでなく，栽培農家が単純に６割減少したことによる地域内労働力の低下の影響もあったと考えられた。

1995年時点での後継者事情については，どの産地も主な栽培従事者の６割以上を女性が占めており，特に河野村においては８割を占めていた。ここから，これまでの水仙生産の主要な担い手が女性であることが示された。また，主な栽培従事者の平均年齢はどの産地も62歳以上であった。後継者の有無については，どの産地も栽培農家の７割以上が後継者を確保できていなかった。他方，後継者の平均年齢は30歳代後半であり，産地全体で見ると，男性の後継者の割合が多かった。これは現役の栽培従事者において見られた男女比とは逆であった。

以上の結果を踏まえて，今後の研究では以下の課題に取り組む必要がある。ひとつは，今回明らかにした内容と，2000年代から現在までの越前水仙の生産・経営の実態をつなげて，通史的に検証する必要がある。そして，各年代の生産・経営状況を比較することが重要となる。なぜならこの比較によって，近年の水仙農家の実態とその変化をより詳細に明らかにすることができるからである。さらに，今回の研究では取り上げなかった戦前から終戦直後にかけての水仙栽培や出荷・販売の実態に加え，戦後の栽培技術の発展や出荷体制の変遷についても，その社会経済的背景とともに掘り下げて検証する必要がある。これらの研究は，戦前から戦後，そして現代に至るまでの越前水仙の生産・経営の実態をより体系的に理解するための重要なステップである。最終的に，今回得られた結果を新しい研究成果と結びつけることで，越前水仙の農業経営史の全貌を明らかにすることができると考えている。これらを次回以降の研究課題として取り組みたい。

【謝辞】

本研究は，2013年７月１日，７月８日に福井県福井市越廼地区において行われた越

前水仙の需要・販路拡大に関する検討会での議論が出発点となっている。その際，そしてその後の聞き取り調査では，越廼村・越前町の水仙農家をはじめ，福井県丹南農林総合事務所丹生技術経営支援課，JA 越前丹生（現 JA 福井），元農協職員（金森和臣氏）の方々から，研究に関する多大な協力とデータを得ることができた。この場を借りて心より感謝申し上げたい。最後に，本論文におけるデータの解釈，主張の一切は私個人に帰するものである。

【引用文献】

五十嵐高志「1985～1986年冬季の積雪に伴う被害」『防災科学技術研究史料』第118号，p. 1-143，1987年

上杉喜寿「漁業と廻船業で栄えた――河野」印牧邦雄監修『市町村で見る福井県の歴史』（p. 556-563），東京書籍株式会社，1986年 7 月

榎本博之「農林水産省生産局長賞 越前スイセンの産地拡大と安定生産体制の構築」『技術と普及』47(5)，p. 59-64，2010年 5 月

河野村誌編さん委員会『河野村誌』福井県郷土誌出版研究会，1984年 3 月

杉山友城「限界集落活性化にみる地域創生の視点と方法：福井県越前町梨子ケ平集落のケースを中心に」『ふくい地域経済研究』(36)，p. 81-109，2023年 3 月

丹生農業改良普及センター編『見て観てわかる！ 丹生の特産物栽培マニュアル―スイセン編―』1993年 3 月

農山漁村文化協会編『今さら聞けない 農業・農村用語辞典』農山漁村文化協会，2021年 4 月

農林水産省「農業物価統計調査（令和 2 年基準）」2024年 7 月

林恭恵，竹澤伊佐男，榎本博之，佐々木和子「越前スイセン栽培作業における労働改善」『産業保健人間工学研究』3，p. 135-141, 2001年10月

福井県『越前海岸の水仙畑：文化的景観保存調査報告書』福井県観光営業部文化振興課編集，2019年 3 月

福井県「ふくいの農林水産業」2024年 3 月

福井農林統計協会『福井農林統計』第14巻 1 号，1965年

文化庁「令和 2 年 生活文化調査究事業（華道）報告書」2021年 3 月

北陸農政局統計情報部編『北陸の特産物』1978年

北陸農政局福井統計情報事務所編『わが村，わが町の特産物―福井県―』1987年 3 月

北陸農政局福井統計情報事務所編『越前すいせん―栽培農家のアンケート結果―』1997年 3 月

前阪良晴『文化水仙学入門』1995年10月

山内孝紀「越前水仙の里 再活性化へ実証実験始動 ～集落・生業の構造的な課題解決と持続可能性への挑戦～：公民協働，交流人口増をキーワードに」福井県立大学地域経済研究所，2020年 1 月

【引用サイト】

気象庁「気象データ」
https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/annually_a.php?prec_no=57&block_no=1316&year=&month=&day=&view=（閲覧日：2024年11月30日）
国土交通省・気象庁「メッシュ平均値2010（平均最深積雪深）」2012年
https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/gml/datalist/KsjTmplt-G02.html（閲覧日：2024年11月30日）
国土交通省・気象庁「メッシュ平均値2020（平均最深積雪深）」2022年
https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/gml/datalist/KsjTmplt-G02-v3_0.html（閲覧日：2024年11月30日）
国土交通省北陸整備局「４．豪雪・小雪の記録」
https://www.hrr.mlit.go.jp/takada/wp-content/uploads/2021/11/kakosekisetsu_syusei2.pdf（閲覧日：2024年11月30日）
産総研地質調査総合センター（2023）20万分の１日本シームレス地質図Ｖ2，凡例400版．https://gbank.gsj.jp/seamless/（閲覧日：2024年10月30日）
福井県農林水産部「R6 農林漁業の動き（農業・機械・経済）」
https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/nourinbu/nouringyogyoudata/nouringyogyoudata_d/fil/03_R6ugoki_enshin.pdf（閲覧日：2024年12月20日）